

市の指定文化財⑤

一石十三仏石仏

阪奈道路の「竜間」バス停から北に入ったところに称迎寺があります。この称迎寺の境内には、高さ140センチ、幅70センチの舟形光背に、十三軀の仏像が彫刻された花こう岩の石仏があります。

仏像はすべて坐像で、三列を四段に重ね、その上に一軀をのせる一般的な配列のものです。さらに像の上に天蓋を頂いています。仏像および天蓋は、厚みのある半肉彫とされるもので、小振りながら細部についても丁寧な彫りとされています。

十三仏に対する信仰は、鎌倉時代のころ中国から伝わった十王の本地仏（日本の神に姿を変えて現れたとされる仏）に、室町時代中期のころ三王の本地仏が加わって成立したもので、このころから死者の成仏までの供養仏として広まっていきます。

その十三仏は、最下段向かって右から不動明王・釈迦如来・文殊菩薩、二段目左から普賢菩薩・地藏菩薩・弥勒菩薩、三段目右から薬師如来・観音菩薩・勢

至菩薩、四段目左から阿弥陀如来・阿閼如来・大日如来で、最上段が虚空藏菩薩となっています。

像の左右下部に銘が刻まれており、慶長11年（1606）2月11日に、生前から死後のために供養をする「逆修」を目的とした講に属した45人によって建立されたものであることが分かります。

代初期の庶民信仰を伝える貴重な石仏です。

（市史編纂委員 岡村喜史）



龍間所在

